「還れぬ旅」論

――存在証明を超えようとする自己――

山根繁樹

はじめに

「還れぬ旅」[1]は、日野啓三が、ベトナム戦争に取材したと思われる作品群[2]から、戦中戦後の植民地と本土を舞台とした作品群[3]へ移行した、第一作目にあたる。「還れぬ旅」では、植民地で兵器工場に動員されている少年《ぼく》が、本土の《時計台》のある高等学校に入学しようとして、連絡船の出る港の町まで旅をする。しかし、戦時下で、軍関係の学校ではなく、しかも文科に入学しようとすることについての、周囲の反応は冷たい。兵器工場での休暇も、一応の手続きをするための二日しか与えられない。だが、《ぼく》は、港の町までの旅を敢行する。《ぼく》は、兵器工場の動員学生という存在証明から逃れようとしているのである。そして、目指すのは、《時計台》に象徴される世界である。

日野啓三は、何故、このような戦時下の植民地を舞台とした小説を書いたのだろうか。そして、ここで書かれた《時計台》とは、何を意味しているのだろうか。本稿では、この二点の解明を目的として、「還れぬ旅」の分析を行い、日野啓三の作品史への位置付けを試みたいと考える。

一、存在証明からの逃亡と《時計台》への憧れ

《ぼく》は、《時計台》のある本土の高等学校に入学を許可されたことを知るが、事実上その実行は不可能である。しかし、《ぼく》は、それを承知しながらも、休暇を貰う。

《「本土との連絡船も事実上欠航状態となったいまでは、実際には無意味に近いことだな」

でも一応の手続きだけはしておきたいから、四五日ほど工場を休んでK市に戻らせてほしいとぼくはいい、結局、二日間だけ休暇を認められた。

「ただし工場の方には、病気として届けておく。監督官がこの時勢に、軍関係でない上級学校への入学手続きなど、よろこぶはずはないからな」

と教師はつけ加えた。》

ここで《ぼく》は、一応の手続きを理由に休暇を貰うが、休暇を貰うこと自体が歓迎されていない。つまり、《ぼく》が《軍関係でない上

級学校≫に入学を希望することは、事実上実現不可能な希望を持っているということなのであり、同時に、≪時勢≫に反することなのである。しかし、それを承知で休暇を貰った≪ぼく≫の決意は、一応の手続きをして気休めにしようといった類のものではない。≪ぼく≫は、戻らない決意をしているのである。結果的に≪ぼく≫は、≪時勢≫という、統制された価値観の枠から逃げようとしていることになる。端的には、≪ぼく≫にとって、動員された兵器工場の学生寮が、そのような統制の行われている場なのである。寮を出ようとする時、各部屋から≪獣の檻の中に似た濃い臭気≫を嗅ぎ取る≪ぼく≫は、寮に閉じ込められ、労働を強いられる兵器工場からの逃亡を企てているのである。

駅に着いて切符を買おうとする≪ぼく≫は、兵器工場からの逃亡に駆り立てられている。

≪「また戻ってくるのだったら、往復を買っといた方がいいよ。K市のように大きな駅では、帰りの切符はなかなか手に入らないから」

一瞬、ぼくは寮のバラックの黒い影と工場の長い灰色の塀、蒸気槌の地ひびきを思い出し、

「片道でいいんです」

と答え返した。

だが片道切符を受けとって振り返り、いつの間に現われたのか、憲兵の姿が待合室の入口のところに立っているのを認めたとき、ぼくははげしく後悔した。≫

この、兵器工場からの逃亡は、より大きな秩序への反抗を意味する。片道切符は、兵器工場から逃亡しようとする≪ぼく≫の決意を示すが、同時に、≪ぼく≫を兵器工場に縛り付ける体制、強制される秩序に対する反抗を意味しているのである。そのため、憲兵が恐怖の対象となる。≪ぼく≫は、憲兵と対決すること、即ち、堂々と体制を批判し、対決の姿勢を見せることはしない。何故ならば、≪ぼく≫にとってその体制は、≪ぼく≫自身の生きている世界を支配するものであり、≪ぼく≫は、それを相対化するだけの論理を持ってはいないからである。そして、その体制は、銃によって支えられてもいる。駅に入って、乗客の身分証明書と切符を検査していた憲兵が、工員服姿の男に≪貴様あ、逃げ出す気だな≫と叫び、大型軍用拳銃を握って追う様子は、≪ぼく≫の恐怖する体制の力を具体的に示している。追われるのが≪ぼく≫であってもおかしくはないのである。

だが、≪ぼく≫自身もまた、統制された価値観に従って生きていたといえる。それに反抗し、逃亡を企てることは、それまでの自己を乗り越えようとすることに他ならない。そして、それを促すのは、≪時計台≫のある高等学校への憧れである。≪ぼく≫は、K市に着き、出会った下級生を殴ろうとするが、思いとどまる。それは、次のような思いを抱いたからである。

≪受験雑誌の写真でしか見たことはなかったけれど、ゲートルの末端がひざの真横にきていないといったようなことで、なぐったりなぐられたりする世界とは別の世界が今もあることを、ぼくは遠い時計台の姿を思い描きながら信じてきたのではなかったのか。≫

下級生を殴ろうとした≪ぼく≫は、それを当然のこととする価値観に縛られている。しかし、≪ぼく≫は、≪ぼく≫自身が取り込まれているそのような世界とは、違う世界があることを信じようとするので

ある。とすれば、その世界とは、価値観を統制されない世界でなければならない。それはどこにあるのか。《ぼく》は、《時計台》のある高等学校にその世界を夢見ており、《時計台》は、その世界の象徴なのである。

しかし、《ぼく》は、《時計台》のある高等学校はおろか、首都の街さえも見たことがない。つまり、《ぼく》にとっての《時計台》のある高等学校は、《ぼく》自身の作り上げた、いわば空想の世界なのである。《ぼく》は、《ぼく》の周囲を隙間なく埋め尽くしている、意味と価値を規定され強制された事物の中から見付け出した、《時計台》の写真に、《ぼく》が見出したいと願った世界を重ねあわせているといえよう。

実際に《ぼく》が生きている植民地の世界は、《ぼく》の夢見る世界ではない。そして、《ぼく》が本土に渡ることができる可能性は、ほとんどない。《ぼく》が置かれている状況は、中学校の老事務官の、次のような言葉に集約されている。

《早く工場に戻って下さいよ。いくら合格通知書がきたって、実際に入学してそこの学籍簿に記入されなければ、きみはそこの学生といえない。ところがきみは本土には行けない。（略）心配しなさんな。ここの学籍簿から抹消してきみを、無学籍者、いわば無国籍者のような状態にしたりはしませんから。学籍も兵籍もない若者を遊ばせておいてくれるような時勢じゃありませんからね。そうなれば、警察というより憲兵の管轄下の問題になる。》

老事務官の言うように、本土に渡って新たな身分証明を得ない限り、《ぼく》は、工場の動員学生という身分証明によってしか、規定されないのである。そして、《ぼく》は、それを認めないわけにはいかない。

《無学籍者か――市中心部の官庁街へと向かう市電の最後部に立って、ぼくは老事務官の言葉を呟いてみた。問題は学籍簿であり身分証明書であり、合格通知や時計台は一片の紙切れ、一片のイメージにすぎない。いやぼく自身がいまや影のような非現実的な存在になりかかっている。》

《ぼく》は、学籍簿や身分証明書といった、外部からの規定によって存在を証明される。そのようにして、《ぼく》は、世界に参加することが許されるのであり、《ぼく》の生きている世界とは、そのように存在を規定すること、意味付けることによって成り立っているのである。だから、《ぼく》が兵器工場に戻らず、逃亡しようとすることは、証明される身分に反することであり、結果的に、存在証明を喪った存在となることなのである。《ぼく》が自覚する《非現実的な存在》とは、生きている世界で存在証明を喪った存在であるといえる。

それでも《ぼく》は、《時計台》のある高等学校を目指す。存在証明を喪おうとし、《合格通知や時計台は一片の紙切れ、一片のイメージにすぎない》と気付きながら、《ぼく》はまだ、ある錯覚から抜け出てはいない。その錯覚とは、次のようなものである。

《（略）それらの不鮮明な写真と多分に誇張された文章だけを頼りに、自分なりのひそかな夢想の対象をつくりあげ育てつづけてきた。そしていま、とうとうその夢想の目的が現実のものとなったわけだ。だが実際にそこまで到達不可能という意味では、時計台はいぜんはるかに遠くあいまいで非現実的でしかない。》

ここでは、到達が不可能であることから、《時計台》が《非現実的》

なものと考えられている。つまり、夢見た世界が、《時計台》のある高等学校において実現されているのかどうかは、問われていないのである。《ぼく》は、《時計台》のある高等学校に入学し、新たな身分証明を得ることによって、存在証明を獲得しようとしているが、それが、夢見た世界に到達することと同義であるとは限らない。《時計台》のある高等学校に到達できないことにより、《ぼく》は、《非現実的な存在になりかかっている》と考える。それは、到達できれば《現実的な存在》になれることを意味する。だが、新たな身分証明書によって規定される存在と、古い身分証明書によって規定される存在との間に、質的な差異があるかどうかを、《ぼく》は考えていない。つまり、《時計台》に夢見た世界は、《ぼく》にとっては、そこに到達すれば実在する筈の世界と考えられているのである。筆者は、これを錯覚と述べた。その根拠は、後に《ぼく》自身が、《時計台》に夢見た世界を実在しないのではないかと考えることにもあるが、その場面については後に考察する。

二、故郷喪失の自覚と《時計台》

《ぼく》は、連絡船への乗船が軍関係者以外では難しいことを知り、中学の同級生の父親である少将に便宜を図って貰うよう、古本屋の主人に勧められ、その勧めに従って、少将に会う。少将は、《ぼく》の予想に反して、怒鳴りつけたりすることはなく、《ぼく》が本土の文科の高等学校に入学しようとする理由を尋ねた。《ぼく》は、それにはっきりと答えることができない。《ぼく》は、その理由を、言葉で説明することができないのである。

《くりかえし読んだ古い受験雑誌の記事の中の言葉の断片が――「自由」とか「真理」とか「自己沈潜」といった言葉が、ぼくの頭の中をひらめいたが、それらはいまの場合、相手を納得させうる言葉ではないし、それ以前にぼく自身のいまの心情――自分でも明らかには意識しがたい憑かれたような暗い夢想の衝動を正しく表現するものでもなかった。つまりいまぼくの行なおうとしていることは、理由を正確に自分でも表現できず、目的も必らずしも定かではないのだ。》

《ぼく》が、《時計台》のある高等学校に入学しようとする理由は、明確ではない。《ぼく》は、《時計台》に、一つの世界の象徴を見てはいるが、それがいかなる世界なのかは、わからないからである。《ぼく》は、兵器工場の動員学生として存在を規定されており、拘束されてもいる。本土の高等学校に入学しようとすることは、新たな存在証明を獲得しようとすることである。しかし、《ぼく》は、その存在証明によって新たに規定され拘束されることで、何を得ることができるのか自覚してはいない。つまり、《ぼく》は、「自由」や「真理」といった言葉の意味する具体的な状態を知っているわけではないのである。そして、《ぼく》を駆り立てる《衝動》とは、既成の存在証明による拘束から逃れて、別の自己を実現しようとするものだといえよう。結局、《ぼく》の夢見ている世界には何の具体性もなく、《ぼく》自身が何を拒み何を目指しているのかが、自覚されていないのである。

少将は、《ぼく》に添え書きをした名刺を渡し、港の輸送司令部に行くように言う。こうして《ぼく》は、連絡船に乗れる便宜を図って貰うことができたわけだが、少将の言葉によれば、連絡船はほとんど

完全に欠航になるはずで、《ぼく》が本土に渡れる可能性は依然無いに等しい。それでも《ぼく》は、やはり港に向かう。《ぼく》は、意志によってではなく、衝動に従って行動しているといえよう。そして、《ぼく》は、そのような自己を自覚している。既に《ぼく》は、存在証明や、行動理由の説明を可能にする意味付けを、越えようとしているのである。

港に向かう列車の中で、熱を出して苦しむ《ぼく》は、前の席に座っていた医専の学生に助けられる。学生は、現地人の旧貴族であり、見渡す限りの田畑と町の土地を一家族で所有するほどの地主でもある。その家で看病を受け、回復しはじめた《ぼく》は、静かに落ち着いた中で、ある充実感を感じている。

《そのとき、ふと、おだやかに充実した感覚が体の底の方から、静かに水面に浮き出してくる泡のように、きわめて自然に意識された。それは声ではなく、はっきりした言葉の形でもなく、形としては全くあいまいでしかなく、そう意識したとたんに消えそうになったほどのかすかな感覚でしかなかったけれども、そのようにあいまいでかすかな思いがけない何かが確かに、そのとき、ぼくの心の水面でひっそりとはじけたようだった。》

長い工場での労働、そこから逃亡している緊張感、精神的疲労、発熱による体力の衰えが、この静かに落ち着いた農村にある一室で癒されている。《ぼく》は、ここで、《体》の感覚として充実感を得る。その充足は、言葉を必要としていない。これまで規定され、拘束されてきた《ぼく》という存在が、意味付けを必要としない充足を味わっているのである。そして、それは、《ぼく》の内部で、外部の状態と融和するように充足することが求められていることの発見でもある。そのため、《ぼく》は、学生に、この家に留まってはどうかと誘われた時、それを期待していたのかもしれないと思うのである。

だが、結局《ぼく》は、その申し出を断る。学生は、自分自身徴兵されることになっているが、もうK市には戻らないと言う。徴兵から逃れようとする学生は、広い土地を所有しており、かくまってくれる多くの人間もいるので、つかまる心配がない。だから、《ぼく》が追われる身であっても、学生にとっては重大な問題ではなく、迷惑ではないのである。その時、《ぼく》は、先の充実感を《回復しかけた体の反応》であったとし、《心の声ではなかった》と気付く。その理由は、この土地が、自分の土地ではないと気付いたことにある。

《彼がこれからしようとしていることは、ぼくが現に始めていることに比べれば比較にならぬほど恐ろしいことであるにもかかわらず、彼には逃げるべき見渡す限りの土地、かくまってくれる多くの人間がある。（略）何よりも彼が現地人、つまりこの土地の人間だからだ。そして戦争は決して彼らの戦争ではない。それに対して、ぼくはぼくらの戦争から、逃げ出そうとしているのではないにしても、勝手に傍道にずれて行こうとしている……

ぼくは工場の寮を出発した日の朝、工場の入口の憲兵の姿を認めて横道の路地にまぎれこんだことを思い出した。幾度もイヌにほえられながら、ぼくはひとり迷路のような薄明の路地をさまよった――本来ぼくのものではない土地を、本来のぼくの仲間から離れて。自分が何かひどく奇妙なことを、もしかすると滑稽なことをしているのではないか、という思いがはじめて、胸の内側が急に冷えこむ

ような感覚とともに、ぼくを襲った。≫

学生は、植民地支配をする側からいかに規定され拘束されようとも、それを逃れて生きる故郷を持っている。学生が故郷で生きるのには、徴兵されているといった意味付けは必要がない。そのような意味付けは、学生にとって、いわば虚構であり、それがなくても、自己存在を故郷の中に位置付けることができるのである。一方、≪ぼく≫は、存在証明を喪うことによって、自己存在をどこにも位置付けることができなくなる。二人の差は、≪ぼく≫が故郷喪失者でもあることを示している。本土を見たことさえなく、≪ぼくのものではない土地≫を、規定され拘束された存在として、存在証明に背かないように生きるしかなかった≪ぼく≫は、その存在証明を喪失して、何処に到達しようとするのか。≪ぼく≫にとって、存在証明を持ち続けることしか、自己存在を支える術がないとすれば、≪ぼく≫は、確かに≪滑稽なこと≫をしていることになる。だが、反面で、学生を規定しようとする存在証明が絶対的な意味を持ち得ないことによって、同じように≪ぼく≫を規定している存在証明が、実は相対的なものでしかないことが暗示されてもいるのである。そして、故郷喪失により自己存在を支える術のないことの自覚は、≪ぼく≫にとっての≪時計台≫を、相対的な存在規定と拘束から逃れて自己存在を支え得る世界の象徴として自覚させるのである。

≪ぼく≫は、学生の叔母が一人閉じ籠っていたという、古い礼拝堂を見上げている。≪ぼく≫は、キリスト教の信仰に興味を持っているわけではない。≪ぼく≫は、教会や塔にひかれるのだが、学生に≪高いものが好きなのですね≫と言われて、次のように答えている。

≪「何かがぼくの中から、いままでのぼくの生活の中から、脱け出したがっているような気がするんです」

そういいながらしばらく意識から離れかかっていた時計台のイメージが再び濃く甦ってくるのを感じた。一面の灰色の空にそびえたつ時計台の姿は、次第に目の前の夕闇に沈む小さな礼拝堂の影と重なっていくようだった。この学生のおばというひとが果して本当にあの十字架を信じたのかどうかはわからない。だがそのひとにはあれが必要だった。この天を指すしるし、地上から逃れる道がそのひとを支えたのだ。そしてぼくにとっても、必らずしもいつかそこに到達するためだけでなく、このいまの自分を支えるためにも、時計台が必要なのだ。≫

≪いままでのぼくの生活≫とは、動員学生として規定され拘束されていた状態を指している。そして、≪ぼく≫の生きている≪地上≫、即ち相対的でしかない意味付けによって埋め尽くされた世界から、逃れる道、それが、≪時計台≫に見出された意味である。存在証明を喪おうとし、故郷喪失者であることも自覚された≪ぼく≫にとって、自己存在を支えるためには、意味付けによる規定、拘束から解放される世界を象徴するものとしての、≪時計台≫が必要なのである。そして、≪ぼく≫は、実在の≪時計台≫がそのような象徴としてあることを、まだ疑ってはいない。

三、旅を続ける意志

学生の家を出た≪ぼく≫は、港のある町に着く。港の輸送司令部では、少将の名刺によって、なんとか渡航許可だけは下りた。だが、連

絡船の出る見込みは、依然としてない。しかし、《ぼく》にとってはそれ以上に重要な出来事が、この港の町で起こる。この町には、病気のため《時計台》のある高等学校から帰ってきた若者がいたのである。《ぼく》は、連絡船出航のめどが立たない中で、自分を励まそうと、その若者がいるという病院を訪れる。その時、若者は、危険な状態にあり、《ぼく》が一人で付き添うことになるのである。

《眼をとじているため正確な顔つきを描き出すことは不可能だが、眼をとじた顔から推定する限り、それはとりたてて何も特別のものもない普通の若者の顔だった。かすかな幻滅感が心のすみをかすめるのをおぼえて、ぼくは自分を恥じた。》

付き添いながら見た顔が普通の若者の顔であることに、《ぼく》が《幻滅感》を覚えるのは、それが《時計台》のある高等学校の学生であることによる。《時計台》のある高等学校にいた若者は、《ぼく》にとっては特別の存在なのである。何故ならば、実在の《時計台》において、《ぼく》の夢見る世界が実現されていなければならないからである。若者は、《ぼく》の夢見た世界の住人であって、《ぼく》の夢見た《ぼく》自身でもある。

この《幻滅感》は、決して具体的な内容を持たなかった《時計台》のイメージをも崩そうとする。

《長い間、ひとりだけで育てあげてきた夢想——細部は不鮮明なままに、いや不鮮明だったためにかえって親しかったその夢想が、平凡なひとりの若者の顔へと凝縮して、そして妙にそらぞらしいものに変ってゆくような気がした。》

《ぼく》は、自己存在を規定され拘束されることから逃れようとし、その到達すべき場所を《時計台》としていたが、《時計台》に具体的なイメージを抱いていたわけではない。そのことが、まず、若者の顔を見たことによって自覚されようとしているのである。

その自覚は、同じ部屋で見付けた帽子の徽章によって決定的なものとなる。その徽章は、《ぼく》が《いつの間にか固く信じこんできた》ような、《内側からの輝きを帯びたもの》ではなく、単なる図案でしかない。そして、そのことが、《ぼく》の《時計台》のイメージに敷衍されるのである。

《ぼくは不意に、これまで考えてもみなかったことに気づいて身震いするような気がした。こうやって無理をして万一首都まで辿りつけても、時計台もぼくの思っているほど高くもなければ陰影もなく、平凡な薄汚れた赤煉瓦の塔にしかすぎないのではないか。ぼくはとんでもない滑稽なことをしているのではないのか。》

《ぼく》は、自分の抱いた《時計台》のイメージが、実在の《時計台》と一致しないのではないかという恐怖感を抱いている。《ぼく》は、ここで初めて、実在の《時計台》と、夢見た世界を象徴する《時計台》の違いに気付いたといえる。《ぼく》にとって、《時計台》のある高等学校に入学して新たな存在証明を得ることと、拘束されている存在規定から逃れることとは、《時計台》のイメージの曖昧さによって、同義であることができた。しかし、ここでそのイメージの恣意性に気付いた《ぼく》の恐怖は、実在の《時計台》に到達できても、《ぼく》の置かれた現状が変わることはなく、《ぼく》の夢見た世界が何処にもないことを知るだけではないかという恐怖なのである。そして、既に指摘した通り、新たな存在証明を獲得することが《ぼく》

の夢見たことなのではなく、既成の存在証明による拘束を拒んで、自己存在を新たに捉え直せる次元を獲得すること、それが、《ぼく》の夢見ていることの内容なのである。

《ぼく》の夢見る世界に、《ぼく》自身が到達することの困難さは、いうまでもあるまい。それは、もはや実際にあるどこかの場所を目指して行くことではないからである。そして、《ぼく》は、そのことを自覚し、自らの旅を次のように考えている。

《多分連絡船は明日も明後日も、もしかすると一か月後もあのまま動かないかもしれない。

いつまでも待ちつづけられる自信はなかった。もしかすると、内部から崩れてしまうかもしれない。だがもはや待ちつづけること――ぼく自身がこの青黒くしわのよった海峡の硬さにはね返されないこと、ぼく自身の塔のイメージを守りつづけることが、旅をつづけることになるにちがいない。

全身の力をこめるようにして海を見つめつづけすぎたため、やがて涙がにじんできた。ぼくは下り道にもどって歩き始めた。》

この最後の場面において、《ぼく》は、《ぼく自身の塔のイメージを守りつづけること》と、《旅をつづけること》を同一のことと考えている。《ぼく》の内部には、《地上》の拘束から逃れようとする《衝動》がある。その《衝動》が、《時計台》のイメージを作り上げ、そこに向かう《ぼく》の逃亡を促してきた。だが、《時計台》のイメージが実在の《時計台》とは異なる可能性が自覚された時でも、《ぼく》の《衝動》が消えたわけではない。《ぼく》には、既に、意味付けによる存在証明が相対的でしかないことも自覚されているのである。だからこそ、既に始まっている旅を続けるために、自己存在を自ら支えるために、《時計台》に見出していたイメージが守られなければならない。つまり、《ぼく》の旅は、単に物理的な移動ではなくなり、自己存在を捉え直せる場を夢見ることにより、夢見る自己存在を支えようとすることになっているのである。

四、作家としての姿勢

《ぼく》にとっての《還れぬ旅》とは、逃亡したことによって還る場所を喪った旅であると同時に、到達すべき場所が既に意味付けられている世界の中に実在するかどうかわからないまま続けなければならない、既成の世界観による世界に《還れぬ旅》なのである。「還れぬ旅」の中の《ぼく》は、戦時下の、強い強制力によって価値観の統制された世界から逃れ出ようとした。しかし、少年である《ぼく》には、その世界の論理を相対化できるだけの論理はなかった。そのため、《ぼく》の目指す《時計台》の世界も、その内容が不明確で、《ぼく》の夢想の域を出てはいない。その意味では、《ぼく》の旅は、非常に幼稚で、無謀なものでしかない。しかし、この《ぼく》の旅によって、与えられる存在証明によって規定されている人間の姿と、そのような存在証明では捉えきれない自己という存在を捉えたいとする人間の欲求が明示されている。そして、《時計台》とは、他者との関係においていわば平面上に規定された存在を、垂直に捉え得る次元[4]を意味しているのである。それは、学生の叔母にとっての《天を指すし》同様、《ぼく》の《時計台》が最後には《塔》とされていることによっても明らかであろう。

「向う側」[5]以降、ベトナム戦争に取材したと考えられる作品を書いてきた日野が、「還れぬ旅」では、太平洋戦争中の朝鮮をモデルにしたと考えられる舞台設定をし、少年を主人公として書いた。そして、この作品には、それまでの作品に見られる、混沌とした世界をそのままに直視しようとするような人間の姿は見られない。しかし、この作品を夢見るような衝動に駆られた少年の物語として完結させることによって、日野は、世界に対する人間の姿勢、世界から規定されて存在する人間ではなく、自ら世界を見出したいと願う人間の夢想を描き得ている。それは、混沌とした世界に取り込まれてしまうのではなく、混沌とした中からでも人間存在の屹立によって新たな世界を開示したいと願う、日野の作家としての姿勢の表明でもあろう。

また、「還れぬ旅」から始まる一連の作品において、太平洋戦争終結前後の植民地である朝鮮と本土をモデルにしたと思われる舞台設定がなされ、少年が主人公とされていることには、日野自身の少年時代の体験が反映されていると考えられる。まず、戦争当時に日野自身が置かれていた状況と、それを振り返った日野の言葉を参照したい。

≪私はほぼ十代を戦争中にすごし、二十代を戦後の動乱期に育った。天皇神話と革命伝説によって一切が強力に意味づけられた世界の中を生きねばならなかったのであって、私自身、それらの意味づけをひたすらに信じたいとは願ったが、私の内部にはどうしても信ずることを拒む冷たく反抗的な何かがつねにあった。≫[6]

これによれば、「還れぬ旅」の、意味付けられた世界への不信は、日野自身のものだったことがわかる。そのような不信の根源は探り得ないとしても、終戦によってその不信が決定付けられたであろうことは、次のような文章からも窺えよう。

≪朝鮮総督と朝鮮軍司令官は敗戦とともに真先きに飛行機で逃げ帰った。日本警察は解体され、日本軍も九月初めのある晴れた朝、京城を去っていった。中学生の私たちに歴史に対する主体的な感覚はなかったし、軍人が大嫌いだった私は戦争の終末に（たとえ敗戦にせよ）とくに感傷はなかったが、それでもひとつの歴史の形が一夜にして崩れ去るその感覚は、十六才の肌にもひらひり[ママ]と泌[ママ]みた。≫[7]

≪だが、やがて校旗の絹布の焼ける臭気が強くにおってきた。生物の死体を焼くような異様に動物性の臭いだった。そのとき、私は急に熱いものがのどからこみあげてくるのを感じ、涙が汗とまじってとめどもなく頬を伝った。十五日の玉音放送には涙ひとつこぼさなかった私が、初めて手放しで泣いた。（略）

動物性の臭いに、私は〝生きた何か〟をいまこの手で焼き捨てているのだ、と実感した。それは三年半の間一緒だった級友たち、山の麓の美しい校舎、夏休みに汗を流しながら崖を崩してひろげた校庭、そこで確実に過された私の三年半の日々……そうした具体的なものすべてを一緒にした何かだった。それが消えるのだ。そして二度とここに戻ってはこれないし、再び皆が集ることもないのだ、と私は泣きながら考えた。（略）

やがて旗は燃えつき、棒も半ばから燃え落ちた。（略）灰がはげしく舞い上った。その灰がまた涙を誘った。〝消えてなくなった〟――という想いが鋭く心に沁みたのだ。≫[8]

日野は、終戦によって、意味付けられたもの、そして、意味付けを促す力が消えてしまう体験をしている。日野の、意味付けられた事物を

絶対視することに対する不信は、この時決定付けられたのではないかと考えられる。その不信は、存在をその根源に立ち返って捉えようとする、日野の思想を、根底で支えるものでもあろう。

日野は、強い拘束力を持つ意味付けによって成立した世界の中であるからこそ、意味付けられた世界の相対性が明らかになることを、自身の体験から知っていた。だからこそ、「還れぬ旅」においては、その只中に置かれた人間が、いかにして自己存在を支えようとするのかを捉えようとしたのである。そして、それによって、日野自身の、新たな次元で世界を開示しようとする作家としての姿勢が表明されているといえる。

註

(1) 「文藝」一九七〇年七月、引用は、『還れぬ旅』(一九七一年一〇月河出書房新社)に拠る。

(2) ここでいう作品群とは、(5)に挙げた「向う側」以下、「広場」(一九六六年七月「南北」一巻一号)、「炎」(「三田文学」一九六六年一一月)、「地下へ」(「文藝」一九六八年一二月)、「デルタにて」(「文藝」一九六九年八月)を指す。

(3) これに当たる作品としては、「めぐらざる夏」(「文学界」一九七〇年一〇月)と「喪われた道」(「文藝」一九七一年五月)がある(いずれも『還れぬ旅』所収)。

(4) 日野の、垂直方向への指向は、他の小説作品においても散見され、日野文学の持つ特徴の一つといえる。それでは、その特徴は何を意味するのか。ここでは、その答えを性急に出すことはしない。それが、本稿の範囲で解決できることとは考えられないからである。そこで、日野がケストラーの『真昼の暗黒』を評した文章を、参考として挙げるにとどめたい。

≪これまで水平に歴史の地平線にばかり向けられていた彼の眼は、垂直の方向をも見ることができるようになる。狭い独房の窓から空が見える。抜けるような紺碧の空虚。あるいは数時間後にその空虚の中に還つてゆく彼ルバショフという一人の人間。かつての彼にとつて、一人の人間とは百万の群衆を百万で割つた答えでしかなかつた。百万分の一という貧しい有限。位置だけあつて実体のない幾何学上の点のような存在。

その彼の内部に今、急激に何かが注ぎこんでくる。砂時計の砂が真中のくびれた箇所を通りすぎてゆくように、時間が彼の体を貫いて流れてゆく。六十年の彼の生涯というかけがえのないそして決して取返しのつかぬ実体が流れこんでくる。彼という点は内容を獲得し急速に異常に膨んでくる。膨張する。無限に。やがてこの無限の膨張はあの空の無限と照応し溶け合う。体中が隅々までしびれるような極度の恐怖感にも似た強烈な充実感が彼を充たす。人間が存在するということ、確実に空の下、大地の上に在るということ、それはこのような状態を云うのではないか。そして世界とは人間をそのようにして生かすものではないのか。≫

(「転向と新しい精神」一九五五年七月「近代文学」一〇巻七号、引用に当たって、旧字体は新字体に改めた。)

他人の小説について述べられた文章であることを考慮しなければならないことはいうまでもないが、この文章の中に、日野の、世界と人間の関わりについての考えの一端が表われていることは確かといえよう。そして、日野は、人間を《生かす》世界の在り方を、《歴史》の《水平》に《垂直》方向への指向を加えたものとして考えようとしている。

(5) 一九六六年三月「審美」二号。

(6) 「事実と虚構」(一九六八年「国語通信」)、引用は、『幻視の文学』(一九六八年一二月三一書房)に拠る。

(7) 「悪夢の彼方――サイゴンの夜の底で」一九六七年執筆後未発表、初出と引用は、『虚点の思想』(一九六八年一二月永田書房)。

(8) 「校旗を焼いた日」(「群像」一九七四年九月)、引用は、『私の中の他人』(一九七五年七月文藝春秋社)に拠る。